

Mojoe West Chronicle

<http://www.m21.or.jp/clubfame/mojoproject/>

phase 17

WHOOPEE'S ①

「L字のフロアを持つ、珍しい一軒は、20年前に、こんな経緯で誕生した。」

「ウーピーズさんは良い感じにライヴハウスのイメージができてはりましたよねえ。同コーナーを続けるうち、他のライヴハウスで聞いた同店への感想である。メロコアやハードコア、京都、もしくは近隣のライヴハウスの中でも、位置付け、立ち位置が確立しているというのである。ライヴハウスとして迷いが無い、という意味に受け取った。」

さて、その「Whoopee's」。同店のステージに立つと、目の前に見えるのはPAブース。しかもブースを囲むガラスまで、ほとんど距離がない。L字型のフロアの角部分にステージを据えるという独特の配置は、他に例を見ない。正直、ライヴハウスの導線としての使い勝手は、決して良いとは思えない。

このライヴハウスが誕生したのはおよそ20年前。同地の地上に建つホテル「ユースヤサカ」と同時に完成した。二存じの読者も多いと思われるが、難波や須磨、名古屋など、10軒ほど同名のホテルが全国にあり、この「Whoopee's」も、実は同名で同系列の店がもう一軒あった。経営陣が音楽好きであり、「ホテルの地下にあるレストランバー、もしくはラウンジ」というのが同店誕生時の役割であった。ハウスバンドを雇い入れ、ホテルの宿泊客や利用客に、レストランで食事を提供しつつ、生のBGMを聴かせる。一時などは、ホテルの宿泊客のために、部屋にいながらライヴを観れるように、各部屋に中継までしていたそうだ。ともあれ同店のステージや席の配置は、そういった用途のもとに考えられたものなのである。元来、いわゆるライヴハウス目的での設計はされていないのだ。オープン当初の集客は今さら語るまでもない。バブル期である。素材がフェイクであろうと本物だろうと金銀に大理石がふんだんにあしらわれた店が多かった時代である。ティスコは全盛、フランクサウンドがメインストリームという時代であった。

「儲からんけど、損はないやろう」
「ブックキングは手探りで始まった。」

先述のような理由で、抱えたハウスバンドはソウルや、当時で言うブラックコンテンポラリー、通称フロコンを聴かせ、一日に3〜4回のステージをこなしていた。ところが如何せん、店自体に客が入らない。同店のオープン直後から店を預かった片山氏に話を聞く。名字よりも「エディ」という名前の方が通りが良いかもしれない。それまではティスコ畑を歩んできた人物である。エディ氏は笑いながら言う。「別に引き抜かれたとかそんな格好の良いもんじゃなくて、食い詰めてたから募集を見て行っただけ(笑)。当時の自身の状況を「クダグダになってる、姪子能収のマンガみたいな感じですよ」と言ってまた笑う。むろん、今だから笑えるのだと思うが、ティスコ畑出身であると同時に、自らバンド経験もあり、バンドがチケットを売り、ライヴハウスに支払ったレンタルフィーから歩合に応じてバンドにキヤラを支払うという、チャージバックというシステムは知っていた。客の入りも広くならず、ハウスバンドに支払うキヤラは容赦なく発生する。それよりも広くバンドを募集して、様々なライヴを日によって行う方が良くはないか? 「儲からんけど、損はないやろう」と。そんな経緯で同店はライヴハウスの性格を濃くしていったのである。

歌謡曲とバンドブームとの狭間で
骨のあるバンドがいた時代があった。

チャージバックは知っていても、それは出演する側としての知識であり、いわゆる「ブックキング」というバンドを招聘する知識はない。独学でバンドを集めて、手探りで再出発であった。80年代の中頃、集ってきたバンドはレベッカやボウイのコピーバンドが多かった。エディ氏が言う「ちよっとし

たGSブームもあつた。グルーブサウンドそのものではないが、少し名の売れたところでは「ストライクス」などが同店に訪れている。「ロレックス」「ピロウズ」「シエイクス」…、確かにバンドブームの到来まで、こぼれくすたねばならなかった当時、骨のあるバンドがいくつもあった。歌謡曲からバンドブームの過渡期にあつて、残念ながら大きなムーブメントにはならなかったが、良いバンドが多かつた。「コレクターズ」は来なかつたなあ。でもスペンシャルズのコピーをやつてる。「タウンボーイズ」ってのはなかなか良いバンドやつた。エディ氏の回想である。

それはメトロが生まれる前の話。クラブカルチャーを支えていた。

「レゲエやつてえな。ある時、エディ氏は友人にこう持ちかけられる。「レゲエやつて言われても、『レコードかけたらええの？』『そもそも日本人でできるヤツいんの？』という感じ。ただクラブつてもんが当時なかつたから、レコードをかけて、DJが主張するイベントは良いと思つた。『東京はこういう感じになって』というもあつた。デイスコを経験した者から言えは、『決まつた曲をかけるだけのデイスコでDJは面白くないねん』となる。デイスコティックではできないこと、それはDJが主張することであつた。ヒップホップと呼ばれる以前、ラップという言葉で紹介され、『ROCK THE WALK THIS WAY』をラップでカバーした『R&B MC』あたりが流行りだした時期でもあつた。『あんなやつたらステージにターンテーブル2台でできるやん、と(笑)。誰も踊るヤツはおらんかつたけど、レコードをかけたがつるヤツは多かつた。デイスコからクラブへの過渡期よりもさらに前、同店の性格のひとつが、この頃に見取れる。

「ライヴハウスだけという暗いイメージがしてね。音楽だけ聴いて、着るものも気にせずに、街遊びしないような人間ばかりが集まるのもイヤやつたから、遊んだら人は『今のこ』が好きでしょ。デイスコに行つてはる人にも『こんなもありませんよ』と、でもさうやつて緊張つたのは5、6年かな。バンドブームとかいろいろが来たから。仕事は仕事として、現金が入るハコ賃しで良いわけで(笑)。ドレスコードが必要だつた。デイスコが最も輝いていた時代を知るエディ氏は、京都において、同店でクラブスタイルの先駆となつた。だがバンドブームの到来で、ライヴハウスは軌道に乗つた。と、同時にエディ氏は一歩下がつたスタンスを取り始めたのではないか、声のトーンがそう思わせる。

スカパラ・フリッパーズ：メインストリームではないライン。

「東京スカパラダイスオーケストラ」を呼んだのは、恐らく京都で初めてだつた。ブッキングに関しては、今も『受動的』とスタッフが反省するのが同店の面白いところもある。スカパラも『誰かが呼んでくれたから(笑)』。『スカフレイムス』とどっちがどやねん?とも思つたけど(笑)という感じなのである。常連や身近な愛好者が勝手にブッキングしてくれる。恵まれた状況が続いた。先のGSブームではないが、このライヴハウスにはメインストリームではないが、粋なジャンルのバンドのライヴが多かつたようだ。バンドブーム華やかな頃ではあつたが、『ロンドンナイト』と呼ばれるライヴイベントが盛況だつた。これも恐らく京都では初めてのイベントタイトルだつたという。「ロックで踊りたい人もいるわけだね。台風の日に2000、3000人を動員したこともある。確かに、当時オビニオンリー的な若者の中からはちょっとしたモッズムーヴメントにはまる者もいた。ヴェスパーミニ、カスタムしたフォルクスワーゲンビートルIIバグ、モッズコートで羽織つて、『THE WHO』や『The Clash』を聴く。90年代にさしかかるかどうかという頃、同じように一部の若者たちがはまつたネオ・アコースティック、『アステックカメラ』や



WHOOPEE'S

京都市東山区
八坂鳥居前下ル493-1
075-551-2331

※ライブ/イベント日・時間は要問い合わせ

「ビューティフルサウス」といった、イギリスから出てきた爽やかなアンダーグラウンドでも言うようなサウンドがあつた。日本でのネオ・アコースティックは、「フリッパーズギター」である。小山田圭吾と小沢健二によるユニットは、後に日本中を席巻する。いわゆる渋谷系系の最も最初の形である。半年後にデビューを控えた彼らがライヴをしたときも、『勝手に来た(笑)。昼間やつたと思う。昼間の方が安かつたからかな』というエディ氏の述べたのである。公衆デビューするんや。スゴいねえ。立派やなあ。粋やなあ。そんな感想でしたね。本当に、彼らは賢くさくさくかつた。このあたりの感想が、エディ氏、ひいては同店の譲れない部分というか、標榜した性格のように思える。先述の「音楽だけ聴いて、着るものも気にせずに、街遊びしないような人間ばかりが集まるのもイヤやつた」という価値観を、見事に貫いて見せている。そしてメインストリームから少し離れたバンドたちを登用すること、これも今に続く同店の性格、もはや役割と言えらるう。

'90年代から続く、メロコア・ジャンプコアのハードコア・メロコア、ジャンプコア。

「90年代も半ばにさしかかつた頃、この「少し外れていた」のがハードコア、メロコアというジャンルである。70年代後半から80年始めにかけて興つたパンクムーヴメントの進化型とどうも少し懸隔があるが、「ハイスタンダード」などがその代表的な例である。その「ハイスタンダード」のライヴが実現した時には、客から「ホンマに来るんや?」と確認の電話が入つたほど。知る者には信じられないブッキングである。だが今ではお馴染みなこのバンドも、当時はもちろんメジャーな存在ではなかつた。むしろ「ライヴ行つたら犯される、とかね(笑)そんなイメージで語られることもあつたくらいだ」ともあれ、以来このジャンルのバンドのメッカとも言えるライヴハウスが同店であり、今でもこの手のライヴやイベントは多い。文頭の「良い感じのライヴハウスのイメージ」というのは、おそらくこれだろう。何故、同店にこのカラーが多かつたのか。エディ氏は、「規制が緩かつたからじゃないですか。他は規制が多いでしょ?時間とか音量とか。ライヴハウスとしては新興勢力なので、フレンドリーだつたと思います。」

出演するバンドについても、相変わらず「バンドマンが勝手に次を呼んでくれるし、イベントをする女の子が増えたい」という状況で、身近な人間がブッキングをするというケースが多かつた。全ては自然発生的に続いていったのである。

「ハイスタが来たときは僕は外で警備してました(笑)」「8、9年前かなあ。『ギターウルフ』が来た時はしんどかつた。フルボリュームの殺人サウンド? 8分間くらい『マシンガン』っししか言わへんにゃもん(笑)」。この頃になるとエディ氏は、さらに一歩も二歩も離れたスタンスを取つていたのだろうか。ちょうどこの頃、現在の同店を支えるメインスタッフが次々と加わりだつた。

「もう解らん。好きにやれ(笑)」。そして先頃、エディ氏は後進に道を譲り、同店を離れた。

...to be continued

